【神殿の幕が裂けた】

［受難物語講解・第27回］

『マルコの福音書』

15章38～39 節

熊　谷　徹

茅ヶ崎同盟教会礼拝説教

2014年6月1日（第1主日・聖餐式）

【序】十字架上の最後の言葉；

主イエスは十字架上で7つの言葉を発した。第一の言葉が「**父よ、彼らを赦したまえ**」。そして、最後の言葉が「**父よ、わが霊を御手に委ねます**」。この言葉を残して主イエスは息を引き取った。**マルコの福音書15章37節**；「**それから、イエスは大声をあげて息を引き取られた。**」紀元30年4月7日金曜日、午後3時頃であった。

【1】神殿の幕が裂けた（38節）；

①その頃、エルサレム市内の神殿に不思議なことが起きた。**38節**である；「**神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。**」

口語訳は冒頭に「**そのとき**」という言葉を入れて、「主イエスが息を引き取ったまさにその時」という感じで臨場感を出している。初代教父たちのある人達は、主イエスが「**大声をあげて息を引き取った**」まさに「その時」に幕が裂けたと考えた。キリストが大声を上げて最後の息を吐き出したその時、主イエスの息すなわち主の霊が神殿まで飛んで行った。そして至聖所の幕を切り裂いたのだと考えた。そうして至聖所の幕をキリストの霊が切り裂いて、誰もが大胆に神の御前に出ることができるようにして下さったのだと考えたのである。しかし、原文には「その時」という言葉はない。原文は「**そして(kai)**」という最も単純な接続詞である。「イエスは息を引き取った。《そして》幕が裂けた」とマルコは言うだけである。だから、息を引き取ったまさに《その時》に幕が裂けたのかどうかは分からない

②エルサレムの「**神殿の幕**」には二種類あった。一つは聖所の入り口に掛けられた幕(kalumma)。当時のユダヤの歴史家ヨセフスがこの幕の荘厳な美しさを伝えている。ヨセフスによると、入り口の扉の上には刺繍を施した見事な幕が掛けられており、神殿の門が開かれている日中は、誰もがその美しい幕を見ることができた。その幕は、縦5メートル半、幅18メートルもある巨大なものである。生地はバビロニアの高価な亜麻布で、そこに青と白と緋色そして紫の糸で絢爛豪華な刺繍が施されている。四色の糸は、青が空気、白が大地、緋色が火、紫が

海を表すとされる。これら四色の糸を駆使して天使ケルビムを刺繍した豪華な幕であり、それが豪華な金の留め具に掛けられていたという。

もう一つは、その幕を潜り抜けて更に奥に行った所にある幕。聖所の奥には至聖所という正方形の部屋がある。至聖所は「いと聖なる所」と書くが、その名の通り神殿の中で最も聖なる場所である。その至聖所の入口に垂れ幕がかかっていて、聖所と至聖所を厳然と分けていた。

主イエスが亡くなった時に真二つに裂けた神殿の「**幕(katapetasma)**」はこの至聖所前の「垂れ幕」である。この壮大華麗な聖なる「垂れ幕」が、「神の見えざる御手」によって引き裂かれたかのように「**上から下まで真っ二つに裂けた**」のである。

③この日はユダヤ教の最大の祭り・過ぎ越しの祭りの日、それも間もなく祭りのクライマックスを迎えようとしていた時であった。エルサレム神殿にも沢山の人が祭りを祝うために集まっていた。祭司達が聖所の中と外を礼拝奉仕のために慌ただしく行き来していた。そこへ突然、大きな地震が起きた(Mt27:51)。そして神殿の聖なる垂れ幕が真二つに裂けたのである。目撃した祭司や民衆は肝を潰したに違いない。

この不思議な出来事は、ヨセフスやユダヤ教の『タルムード』やローマの歴史家タキトゥスが書き記している不思議な出来事と何らかの関係があるのかも知れない。ヨセフスによると、エルサレム神殿が崩壊する40年前、大きな地震が起こり東側の門がひとりでに開き大きな音がしたという。この記述とマルコが伝える神殿の幕が裂けたこととの関連は不明であるが、興味を引かれる話である。ちなみに、「エルサレム神殿が崩壊する40年前」とは紀元30年、即ちキリストが十字架に死なれた年である。

④マルコは「**上から下まで真っ二つに裂けた**」と言う。「**真二つに裂く**」という行為は普通は何か大事な物を捨てる時や、断固捨てるのだという決意を表す時にすることである。ではこの時、どんな大事な物が捨てられたのだろうか。それは

「聖なる神殿の幕」である。その幕は聖所と至聖所とを隔てていた幕である。人は誰も至聖所に入ることはできない。そこに入ることが出来るのは大祭司だけであり、しかも1年に1度しか許されなかった。その日、大祭司は至聖所に入り、罪の贖いのための儀式を行なった。その幕が「**上から下まで真っ二つに裂けた**」ということは、至聖所と聖所との間にあった隔ての幕が取り除かれたというである。ということは、誰でも至聖所に入ることができるということである。

【2】イエスという新しい垂れ幕（ヘブル10：19～20）；

①「**神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた**」という不思議な出来事の霊的な意味を解き明かしてくれたのが、『**ヘブル人への手紙**』である。その**10章19節と20節**にこうある；「**こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができるのです。**20**イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。**」

②19節の「**まことの聖所**」とは、地上の至聖所ではない「天の至聖所」即ち「聖なる神の御前」のことである。「まことの聖所に入る」という言い方には、「地上の神殿の至聖所に入る」ということがイメージされている。地上の神殿の至聖所に入ることは誰にも許されず、年に一度だけ入ることが許された大祭司でも、至聖所の前にある「垂れ幕」を潜り抜けねば至聖所には入れなかった。その聖なる垂れ幕が「**上から下まで真っ二つに裂けた**」。そしてそれに代わって全く新しい幕が現れた。それが主イエス・キリストである。

③20節に「**ご自分の肉体という垂れ幕**」とある。この「**垂れ幕(katapetasma)**」という言葉はマルコが使った「**幕(katapetasma)**」と同じ言葉である。ヘブル書の著者は、十字架に死なれたキリストを、エルサレム神殿の至聖所の幕、それも、キリストが死なれた時に裂かれた「神殿の幕」とダブらせているのである。「**ご自分の肉体という垂れ幕**」とは十字架に死なれたキリストのことである。そのことは19

節の「**イエスの血によって**」という言葉からも明らかである。

古き地上の神殿の幕は真っ二つに裂けた。そして新しい幕、イエス・キリストというまことの幕が現われた。今や私達は、神殿の幕をくぐり抜けて至聖所に入るのではなく、十字架に死なれたキリストという真の垂れ幕をくぐり抜けて、まことの至聖所なる神の御前に出て行くことができるのである。

④主イエスが十字架で「肉体」を裂き「血」を流された。その「**イエスの血によって**」(Hb10:19)、即ち、キリストの十字架の死によって、私達は聖なる神の御前に大胆に出て行くことが許されている。主イエスが十字架に「ご自分の肉体」を差し出して贖いの死を遂げて下さったがゆえに、キリストという「**垂れ幕を通って**」、私達は「**大胆にまことの聖所にはいることができる**」(Hb10:19)。主イエスの十字架の贖いのゆえに、私達は罪を赦されて神の御前に進み行くことが許されているのである。

【3】心の幕が裂ける時(39節);

(1)ゴルゴタの丘に戻ろう。神殿の幕が裂けた頃、十字架の立つゴルゴタの丘では、一人の男の「心の幕」が裂けていた。**『マルコの福音書』15章39節**である;「**イエスの正面に**[*「イエスと向かい合って」]**立っていた百人隊長は、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「この方はまことに神の子であった。」と言った。**」

(2)このローマ軍の百人隊長は、主イエスの十字架刑のすべてを目撃して来た。不当な夜の裁判、鞭打ち、十字架を背負って歩いた「悲しみの道・ヴィア・ドロローサ」、ゴルゴタの丘の十字架、十字架上の七つの言葉、そして死、これらすべてを見てきた。しかも、それら一連のことを指揮して来たのである。その彼が感極まって言ったのである;「**この方はまことに神の子であった。**」彼は主イエスのうちに「**この方はまことに神の子だった**」としか言いようが無い崇高なもの、荘厳で聖なるもの、気高いものを見たのである。

（3）彼はローマ帝国の軍人である。ローマの軍人として彼はこれまでローマ皇帝を「神の子」と呼び、皇帝礼拝をして来た。その彼が今、「**この方はまことに神の子だった**」と言ったのである。それがどんなに物凄いことなのかは想像に難くない。戦時中の日本を考えれば分かるだろう。あの時代、日本中が「天皇は神である」と信じこまされていた。そのことに疑いを挟むようなことを言ったら、たちまち「非国民」呼ばわりされ、逮捕され拷問を受けた。大勢の牧師・キリスト者たちが迫害され、殉教の死を遂げた牧師もいた。そのことを思うと、このローマ兵士の「**この方はまことに神の子だった**」という告白の重みが分かる。これは命がけの告白だったのである。

つい少し前までは、彼にとって、イエスという人はただの死刑囚に過ぎなかった。だが、主イエスの十字架上の言葉、「**父よ、彼らを赦したまえ**」という祈り、。少しも動じない凛とした態度、そして、「**父よ、わが霊を御手に委ねます**」という辞世の祈り…それらを見て行くうちに、それまで彼の心を厚くおおっていた「幕」が「真二つに裂けた」。そして主イエスの本質、「**まことの神の子**」という本質を垣間見た。この内面的な「幕裂け」が彼の新しい人生の幕開けとなったのである。

古い言い伝えによれば、彼の名はロンギヌスという。ロンギヌスはキリストを「まことの神の子でありわが救い主である」と信じ、クリスチャンとなった。そして、ローマ軍の兵士たちにキリストの福音を宣べ伝えた。その後、主イエスの遺体を収めた墓の持ち主アリマタヤ・ヨセフと一緒に伝道の旅を続けた。やがて、今のトルコのカパドキアの教会の司教となり、迫害の嵐に巻き込まれ、殉教の死を遂げた、と言う。

【結】新しい生ける道；

『ヘブル人への手紙』10：20に、「**イエスは《ご自分の肉体という垂れ幕》を通して、私たちのためにこの《新しい生ける道》を設けてくださったのです**」とあった。キリストはご自身の十字架の死によって、古き神殿の幕を真二つに裂き、新しい垂れ幕を造ってくださった。私達は、その垂れ幕を通って大胆に聖なる神の御

前に出て行くことが許されている。その垂れ幕とは、十字架に死なれた主イエスご自身に他ならない。主イエスは私達を聖なる神の御前に導くために《**ご自分の肉体という垂れ幕**》を裂かれ、私達を「**新しい生ける道**」へ導き入れるために十字架に死なれたのである。

聖書はこう告げている;「**[キリストは]自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。**25 **あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。**」…『ペテロの手紙第一』1章24節25節◇